

鹿児島県における平成23年産いも類の生産と課題

鹿児島県農業開発総合センター 農業専門普及指導員

若松 謙一 馬場 高行

1. はじめに

鹿児島県の農業は、温暖な気候、広大な畑地などの特性を活かして、園芸、畜産を中心とした農業生産が営まれている。しかし一方では、台風などによる自然災害が多い上、シラス等の火山灰性不良土壌も広く分布し、また、大消費地に遠いなど、自然的、地理的に不利な条件もある。

サツマイモ、ジャガイモ等いも類は、こうした条件下にあっても比較的安定した生産が可能な作物であり、防災営農作物としても重要な位置を占める基幹作物となっている。また、青果用として消費地に出荷されるだけでなく、サツマイモを原料とするでん粉産業や焼酎産業、加工食品産業は、

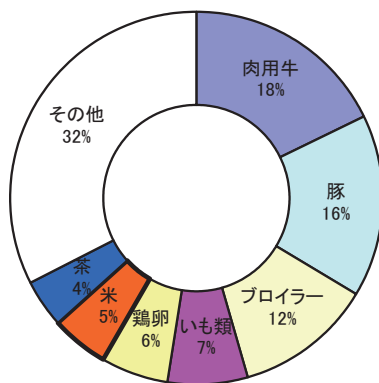


図1 鹿児島県の農業産出額の内訳

本県の地域経済を支える上で大きな役割を果たしている（図1、図2）。ここでは、サツマイモやジャガイモの本県における生産と課題について触れる。

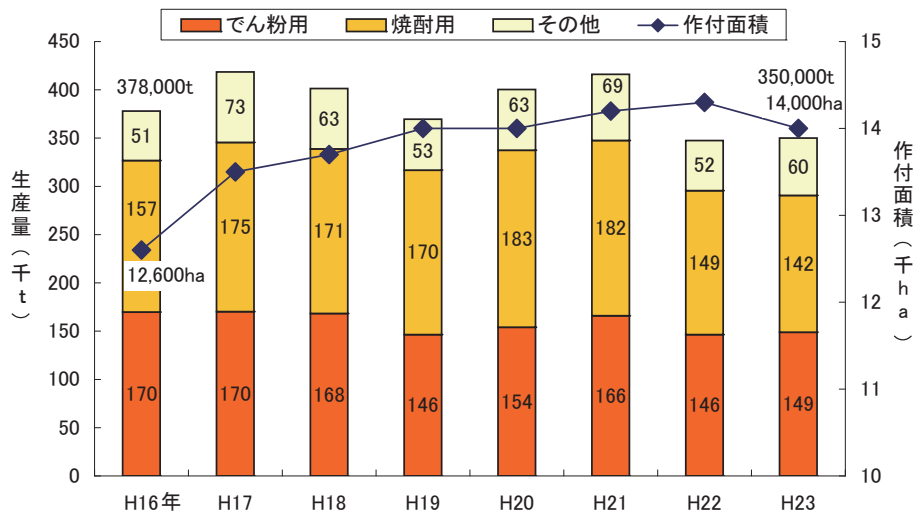


図2 サツマイモの用途別作付面積・生産量の推移

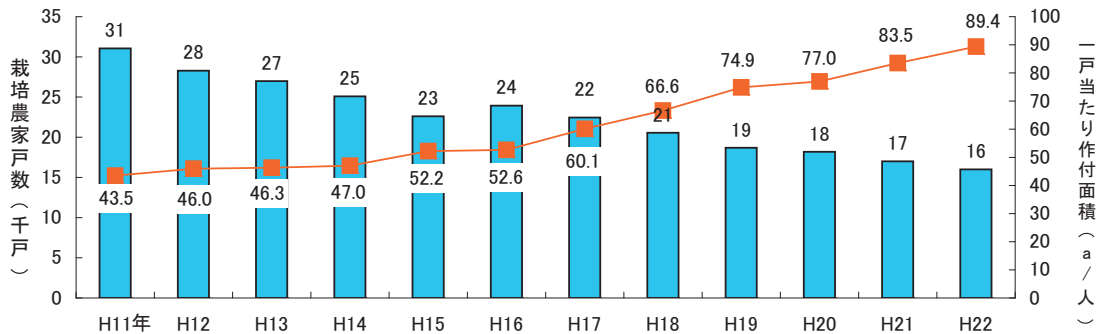


図3 サツマイモ農家戸数と1戸当たり作付面積の推移

2. サツマイモの生産の概況と生産の課題

平成22年産のサツマイモ産出額は約171億円で、本県の耕種作物の中で米、茶に次ぐ産出額を占めている。作付面積は約1万4千haで横ばい傾向にあるが、生産量はここ2カ年低温や日照不足の影響で少なくなっている。サツマイモの栽培農家戸数は農家の高齢化等により減少しているものの、規模拡大が進みつつある（図3）。

（1）でん粉原料用

サツマイモの主用途であるでん粉原料用は、平成23年産で14万8千tとサツマイモ生産量の約42%を占めている。県内で栽培されている主な品種は「シロユタカ」で、その他にでん粉歩留まりの高い「ダイチノユメ」などの品種も栽培されている（表1）。マルチ栽培は約5割で、無マルチ（露地）

栽培に比べて、生産コストや労力がかかる反面、初期生育の安定性に優れ、雑草対策の面からも有効で、気象変動に強く多収となる長所がある。平成23年産は、春先からの低温により初期生育が遅れ、9月以降の好天で生育は回復したものの、概ね平年並～平年比1割減の収量が見込まれる。現在、生産されたでん粉の約7割程度は糖化原料用であり、食品としての直接利用は少ない中、平成21年に低温糊化性で耐老化性に優れたでん粉を有する新品種「こなみずき」が育成され、試験栽培が始まるとともに用途拡大が期待されている。

（2）焼酎原料用

焼酎原料用サツマイモは、平成23年産で約14万2千tとサツマイモ生産量の約40%を占めており、約9割がマルチ栽培である。

表1 平成23年産シロユタカの上いも収量（kg/a）の推移

収穫時期	8月	9月	10月	11月
マルチ栽培	1 8 5	3 6 6	4 9 7	6 1 7
平年比（%）	8 6	1 1 2	1 1 3	1 1 8
前年比（%）	7 9	1 1 9	1 1 7	1 1 5
無マルチ栽培	3 6	1 8 2	2 7 0	3 9 1
平年比（%）	4 9	9 3	8 4	9 7
前年比（%）	1 4 7	1 7 6	1 3 8	1 1 3

※農業開発総合センター大隅支場調査データ
（マルチ栽培：4月16日植え、無マルチ栽培：5月14日植え）

表2 「コガネセンガン」の上いも収量 (kg/a) の推移

	8月	9月	10月	11月
マルチ栽培	185	290	391	552
平年比 (%)	85	91	99	120
前年比 (%)	96	102	105	115

※農業開発総合センター大隅支場調査データ（4月16日植え）

県内で栽培されている品種は「コガネセンガン」が9割以上を占めており、独特の香味から焼酎の最適品種として実需者から評価されている。しかし、いもの貯蔵性や外観が悪く、線虫にも弱いため、生産者や実需者からは、品種開発や多収栽培技術への要望が高まっている。平成23年産は、育苗期の2月が低温となり、苗の生育遅れによる植付時期の遅れや、春先からの低温により初期生育が遅れたことから、8～9月に収穫された焼酎用のコガネセンガンについては、平年単収の1～2割減収であったと推測される。10月以降収穫分については、概ね平年並以上の収量であった（表2）。今後、冬の育苗期における保温対策も改善する必要がある。

（3）青果用、加工食品用等

県内で栽培されている青果用や加工食品用の主な品種は「ベニサツマ」で、高系14号の選抜種である“土佐紅”の中から、鹿児島に適した系統を選抜している。また、近年、種子島の西之表市安納地区が発祥とされる“安納いも”が、しっとりとした食感と甘さから、全国的に人気が高まり、作付面積が急増している。さらに、安納いもと同様に、肉質が粘質の「べにはるか」の作付面積も増えつつある。

青果用サツマイモは、外観が重視されるため、茎頂培養によるウイルスフリー苗の利用し、種いもを用いない挿し苗育苗が一

般的で、健全優良種苗の供給体制が定着している。しかし、平成23年産は長いものに比べて販売単価が安い丸いものの比率が高くなり、農家の所得に影響を与えている。丸いも比率増加の要因として、根の伸長期に当たる春先の低温や土壌の物理性の影響が考えられるが、今後、長いも率向上のための技術対策が重要な課題となっている。

3. ジャガイモの生産と課題

（1）生産の概況

本県のジャガイモ産地は、南から順に沖永良部、徳之島、種子島、そして県本土のなんぐう、長島で、南北に長い地理的広がりを利用したりレー出荷の取り組みが行われている。栽培されるほ場は、赤土土壌が多く、きれいな色となめらかな肌が特徴であり、春を呼ぶ季節商材（新ジャガ）として消費地の評価が高い（図4）。

平成20年のジャガイモ産出額は約97億円、本県の野菜産出額の第1位品目であり、全体の16%を占めている。作付面積は、市況の影響により年次差はあるものの4,400ha前後で、生産量は約9万tで推移しており、全国3位である。平成23年産が市場入荷量の減少等から高単価で推移した影響もあり、平成24年産の面積は増加傾向である。

品種は、「ニシユタカ」（45%）、「メーカーイン」、「ホッカイコガネ」、「農林1号」、「デ

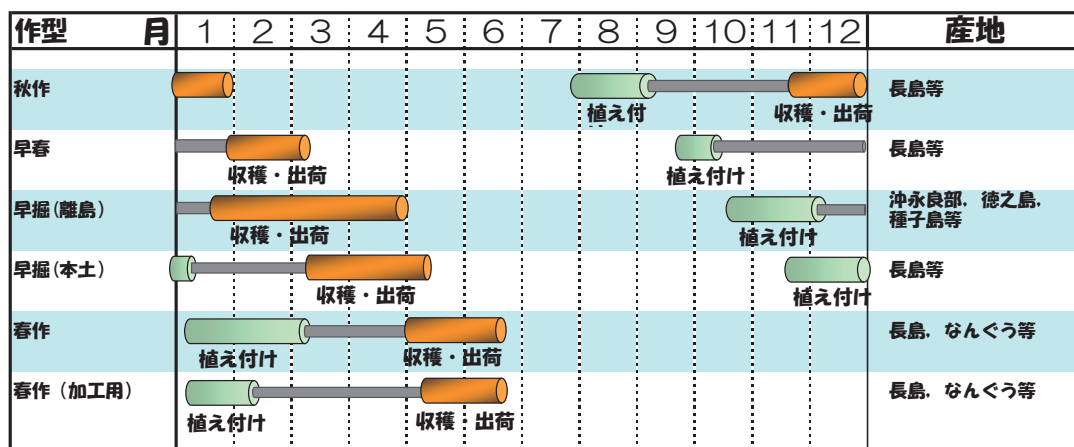


図4 ジャガイモの栽培体系と出荷時期

ジマ」、加工食品用として「トヨシロ」等が栽培されている。

(2) 課題と対策

平成23年産では、一部に寒害、霜害が発生したが、これら気象災害は大幅な減収につながるため、被覆資材の利用、散水氷結法などを含めた対策の取り組みを急いでいる。また、疫病、そうか病等の発生も依然としてみられており、種いも消毒、薬剤のローテーション散布等の指導だけでなく、消毒作業を受託する組織の育成も始まりつつある。土壌管理では、そうか病発生を懸念するあまり長年に渡り土壌改良資材を施用せず土壌が酸性化したことが要因で、萌芽不良や生育不良、減収が問題となっているほ場もある。このため、土壌診断に基づく石灰質資材の施用を啓発、指導している。

加工食品用では、管理作業機の踏圧によ

る土壌物理性の悪化や収穫時期の多雨により腐敗、障害等の発生があり、品種や土壌物理性改善の検討を始めている。

4. おわりに

鹿児島県では、サツマイモ、ジャガイモの生産・流通から販売まで様々な取り組みを行っているが、生産面においては気象災害、各種病害や、高齢化等による栽培農家の減少、省力、機械化の立ち遅れだけでなく、サツマイモでん粉を巡る関税率削減の議論など、内外の情勢は厳しいものとなっている。しかし、サツマイモ、ジャガイモは、鹿児島が全国に誇るなくてはならない作物であり、今後とも、生産振興を推進するとともに、用途別の取組みも含めて、「鹿児島のいも」を全国の消費者に届けていきたい。